

## 黒木龍三教授記念号に寄せて

黒木龍三先生がこれまで立教大学において果たしてこられた大きな業績に感謝し、経済学研究会はここに『立教経済学研究』の月号を「黒木龍三教授記念号」として刊行いたします。

黒木龍三先生は、1996年4月に立教大学経済学部助教授として着任され、同学部教授、大学院ビジネスデザイン研究科教授を歴任され、2019年3月に退職されるまで、実に23年間の長きにわたって、学問の府としての立教大学の発展に大きく貢献されました。この間、2001年から2002年に経済学研究科大学院主任(博士課程前期課程主任・後期課程主任を兼任)、2015年から2019年にはビジネスデザイン研究科後期課程主任を務められました。とりわけご自身が社会人大学院生として学究の道に入られたというご経験を活かされて、経済学研究科国際企業環境コース(現 社会人コース)の設置準備委員長として新設にご尽力されました。同コースは、2001年4月に開設されましたが、本学における社会人大学院の先駆けです。現在でも、立教セカンドステージ大学専攻科教授として、社会人教育の最前線に立たれておられます。

黒木先生は、経済学部においては、経済原論B、景気変動論、初級マクロ経済学、そしてゼミナールを担当され、大学院(経済学研究科、ビジネスデザイン研究科)では景気変動特論と現代経済論を担当されました。毎年のように、フランス、オーストラリア、中国などから多くの留学生を受け入れられ、熱心に指導してこられました。学部のゼミナール、大学院博士課程前期課程の演習指導・後期課程の研究指導を通して多くの大学院生を育てられ、黒木先生門下の若い研究者が全国の大学に教員として巣だっています。また、学生団体である体育会自動車部の部長も長年にわたって務めてこられました。

黒木先生のご研究の中心は理論経済学にあることはいうまでもありませんが、その歴史的な成立過程にまで遡られるなど、ご研究の領域は広範にわたっています。黒木先生は、大学院時代にスラッフア(P. Sraffa)、パシネッティ(L. L. Pasinetti)、森嶋通夫、置塩信雄らの多部門経済の理論を研究され、その動学化を試みられました。その研究成果は、1983年に『経済論叢』(京都大学)に発表され、その翌年には、利潤率格差に反応する部門間資本移動を明示することに成功し、部門間利潤率均等化の条件について理論計量経済学会大会で報告されました。サミュエルソン(P. Samuelson)らによる多部門モデルの双対不安定性定理に対する反証にもなっているこの論文は高い評価を受けて、Springer社刊*Competition, Instability, and Nonlinear Cycles*に収められて、海外の学術誌でもたびたび取り上げられています。

黒木先生は、その後も古典派経済学以来の市場価格の自然価格への収束問題 (Gravitation) に関心を持ち続けられますが、経済における貨幣の役割に焦点を合わせて、ケインズ (J. M. Keynes) の思想体系の研究に向かわれます。当初は、ケインズの理論に内在するストックとフローの因果関係に注目されました。そして、米国のニュースクール大学 (New School for Social Research) からの招聘を機に、当時脚光を浴び始めていたミンスキー (H. Minsky) の「金融不安定性の理論」のモデル化に着手されました。在米中に、米国経済学会で金融安定性のモデルを報告され、帰国後にミンスキーの金融不安定性理論の動学化についての論文を多数発表されています。金融へのミクロ理論的アプローチの重要性についても配慮されて、短期利子率と長期利子率の問題や預貸利子率の格差について「銀行の利潤最大化行動」を基軸のひとつに据えて研究されています。

今世紀を迎えるころから、黒木先生は経済理論の歴史的背景の研究にも取り組まれています。重農学派の祖ケネー (F. Quesnay) の「経済表」について線形計画法で説明することを試みられ、その成果をヨーロッパ経済学史学会で報告されました。その後も18世紀フランスの啓蒙主義経済理論に傾倒され、カンティロン (R. Cantillon) やチュルゴ (A. R. J. Turgot) の理論を原典に忠実にモデル化することに取り組まれています。

また、黒木先生は、多くの国際会議の開催にも尽力され、2008年にはニュースクール大学のゼムラー (W. Semmler) 教授、同じくネル (E. J. Nell) 教授、グラーツ大学のクルツ (H. D. Kurz) 教授を招聘して、ケインズの経済理論のワークショップを企画されました。2012年には、ダブリン大学のマーフィ (A. E. Murphy) 教授、パヴィア大学のヴァッジ (G. Vaggi) 教授らを招聘して、18世紀フランス啓蒙期の政治経済学についての学会を主催されました。この2つの国際会議の成果は、Routledge 社刊 *Keynes and Modern Economics* に纏められています。今秋もパリ第2大学のファッカレロ (G. Faccarello) 名誉教授、ソルボンヌ大学のシュタイナー (P. Steiner) 教授らを招聘して、「18世紀フランス経済学とその影響」と題した国際会議の開催に向けて準備を進めておられます。

私事で恐縮ですが、“ゼミ合宿の下見”と称して、千葉勝浦での旅行にご一緒させていただいたことがありました。酒宴でお話し下さった先生の学生時代のエピソード (奥様との馴れ初めなど)、朝市での買物、房総半島海岸線のドライブはとても楽しく、今でも懐かしく思い出されます。いつも気さくに声をかけて下さった黒木先生がご退職されたことに本当に寂しさを感じざるをえません。ご指導をいただく機会があることを願うばかりです。

黒木龍三先生がこれからご健勝でますますご活躍されることを祈念いたしまして、本記念号の発刊の辞に代えさせていただきます。

2019年9月

経済学部長 内野 一樹